

価値判断を通して 音楽を創造的に鑑賞できる授業モデルの研究

—— 「創造的アプローチ」を手立てとして ——

長期研修員 島田 聡

《研究の概要》

音楽文化についての理解を深めていくことを目指す高等学校芸術科（音楽）における鑑賞の学習指導は、中学校音楽科の学習の上に立ち、音楽を形づくっている要素の知覚やそれらの働きの感受を根拠として、自分なりに楽曲の価値を判断し、創造的な鑑賞の能力を伸ばすことをねらいとしている。そのために必要な知覚・感受に関する活動の工夫と価値判断の問いの2点を、本研究では「創造的アプローチ」として設定した。この「創造的アプローチ」を用いて楽曲についての価値判断を促し、主体的・創造的に味わって聴く力の育成を目指す授業モデルを作成した。

キーワード 【音楽—高 鑑賞活動 創造的アプローチ 音楽文化 授業モデル】

群馬県総合教育センター

分類記号：G05-05 平成26年度 252集

I 主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成20年1月）は、学習指導要領改訂の基本的な考え方を示すとともに、各教科等の改善の基本方針や主な改善事項を示している。その中の小学校、中学校及び高等学校を通じる音楽科、芸術科の改善の基本方針、及び、高等学校芸術科の改善の具体的事項においては、鑑賞の学習指導の質的充実・改善を挙げている。この内容を受け、高等学校学習指導要領解説芸術編（平成21年12月）の「音楽Ⅰ」における目標の解説は、具体的な鑑賞の学習指導の姿として、「鑑賞において、音の組み合わせの特徴をとらえ、楽曲の背景をかかわらせて考え、自分なりに価値判断し、批評という形で表現することも創造的な活動」であると示している。その実現のため、「音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受」して、「思考・判断し表現する過程を大切に」しながら、鑑賞の能力を伸ばしていくことが求められている。また、中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年7月）はこの基本となる考え方を示しており、中学校・高等学校間における指導内容の関連が図られている。その結果、「高等学校では、中学校音楽科の学習の上に立ち、文化的・歴史的背景などの広い視野で音楽に目を向けて、音楽文化の理解を深めていくこと」を目指している。

以上のような内容を持つ学習指導要領の改訂とほぼ同時期（調査期間：平成20年10月1日～11月28日）に調査が実施され、国立教育政策研究所によって公表された「特定の課題に関する調査（音楽）」（平成22年7月）においては、鑑賞の学習指導についての課題が見えてくる。中学校第3学年とその教師を対象とした鑑賞に関する質問紙調査の中で、75.6%の生徒が「音楽の授業で鑑賞するとき、その音楽の声や楽器の音色の特徴を聴き取っていますか」の問いに肯定的な回答をしているにもかかわらず、「その音楽から感じ取ったことを言葉や文章などで表していますか」の問いに肯定的な回答した生徒は52.1%、さらに「その音楽から感じ取ったことを言葉や文章などで表すことは好きですか」の問いに肯定的な回答をした生徒は36.5%であった。また、「音楽の授業において、生徒が、音楽の諸要素やそれらの働きと曲想とを結び付けて、言葉で表すことのできるように指導を工夫していますか」との問いに肯定的な回答をした教師は50.0%であった。

これらの結果は、平成20年度時点の鑑賞の学習指導に関する実態や課題の一端であり、平成10年度告示の学習指導要領に基づく教育課程による学習内容が反映されたものである。このため、現行の学習指導要領の趣旨などが反映された学習についての結果ではない。しかし、質問紙の結果は、現在も学校現場で見られる課題を端的に表している。音楽的な特徴を基にその音楽のよさや美しさを味わっている多くの生徒の姿があるものの、味わったことを言葉や文章などで表すことに消極的である生徒も6割以上存在し、その支援として指導を工夫している教師が半数にすぎないということである。

また、現行の学習指導要領が施行された後の実践にも課題はある。表現領域と鑑賞領域の関連を図った題材において「既成の曲を歌や楽器で表現する過程で、そのための参考となる演奏を聴取することをもって鑑賞の学習を終えてしまっている例」（大熊，2013）のように、表現活動を深めるための知覚・感受を鑑賞の学習指導と位置付けている事例や、鑑賞領域のみの実践においても、「聴いた音楽に対して、漠然とした感想を述べることにとどまっている」（宮下，2013）例のように、受動的であり、価値判断という点で十分な指導と言えない事例が依然として実践されていることも否定できない。これらはそれぞれ、表現活動に従属的な聴取の活動であったり、美学における「印象批評（客観的尺度によらず、作品から受けた主観的印象に基づいて論じようとする批評態度）」にとどまる活動であったりと、現在の鑑賞の学習指導に求められている姿とは言い難い。

上記の調査と鑑賞の学習指導の事例とは、表裏一体の関係を持つと考えられる。教師の指導の工夫がなされなければ、鑑賞の学習は受動的なものであり続け、音の組み合わせの特徴と楽曲の背景とを関わらせることなしに漠然とした感想を述べるための指導であれば、創造的な鑑賞にはなり得ない。

以上のことから、本研究では、鑑賞の学習指導のより一層の充実に向けて、以下の2点において具体的な指導の工夫・改善が必要であると考えた。1点目は、音楽を形づくっている要素を知覚・感受させるための学習活動の工夫であり、2点目は、知覚・感受した音楽を形づくっている要素と音楽のよさや美しさを結び付けて価値判断するための適切な問いを設定することである。これら2点を合わせて「創

造的アプローチ」とし、これを活用した題材を作成して、その有効性を授業実践において検証した。「創造的アプローチ」を活用し、音の組み合わせの特徴を捉えたり、それらと楽曲の背景とを関わらせたりする鑑賞の学習指導を通じて、楽曲についての自分なりの価値判断をする創造的な鑑賞の学習が実現されると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

鑑賞の学習指導において、音の組み合わせの特徴を捉えたり、それらと楽曲の背景とを関わらせたりして、楽曲についての自分なりの価値判断をする創造的な鑑賞の学習にするため、音楽を形づくっている要素を知覚・感受させるための学習活動の工夫である「知覚・感受に関するアプローチ」と、知覚・感受した音楽を形づくっている要素と音楽のよさや美しさを結び付けて価値判断するための適切な問いである「価値判断に関するアプローチ」とで構成される、「創造的アプローチ」を活用することの有効性を明らかにする。

III 研究仮説（研究の見通し）

1 知覚・感受に関するアプローチ

音楽を形づくっている要素の知覚とその働きを感受する場面において、比較聴取や視覚化などの音楽を形づくっている要素を知覚・感受させるための学習活動の工夫である「知覚・感受に関するアプローチ」を設定することによって、生徒自身が音の組み合わせの特徴を捉える学習となるであろう。

2 価値判断に関するアプローチ

知覚・感受した音楽を形づくっている要素と音楽のよさや美しさを結び付け、批評する場面において、楽曲の背景と関わらせながら知覚・感受した音楽を形づくっている要素と音楽のよさや美しさを結び付けて価値判断するための適切な問いである「価値判断に関するアプローチ」を設定することによって、音楽を形づくっている要素の知覚・感受を根拠とした自分なりの価値判断ができ、創造的に鑑賞する学習となるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 音楽を形づくっている要素の知覚・感受とは

高等学校学習指導要領解説では、「音楽を形づくっている要素とは、中学校音楽科で示しているように、音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などを指す。また、「知覚」とは、聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識することであり、「感受」とは、音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れることである」と定義している。さらに、中学校学習指導要領解説では、特質を「音や音楽がもつ特徴的な性質であり共通に感受されやす」いもので、雰囲気は「その時々状況などによって一人一人の中に自然と生まれる気分やイメージなどを包含している」と示している。

また、西園芳信は、音楽を「音楽の形式的側面」、「音楽の内容的側面」、「音楽の文化的側面」の三つの側面から捉え、前者二つを認識することを、それぞれ「音楽の形式的側面を知覚する」こと、「音楽の内容的側面を感受する」ことと整理している（西園2005）。

つまり、音楽を形づくっている要素の知覚・感受とは、聴覚を中心とした感覚器官を通して声や音の音色や、音楽がもつリズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽の形式的側面を判別し、意識したり認識したりすることによって、それらの特徴的な性質や、自然と生まれる気分やイメージなどの音楽の内容的側面を感じ、受け入れることを意味する。

(2) 価値判断とは

学習指導要領解説において、創造的な鑑賞の活動は「自分なりに価値判断し、批評という形で表現すること」と示されている。これは、独善的な価値観を表現する活動ではなく、音楽を形づくっている要素を客観的な根拠として、音楽のよさや美しさについて批評する活動である。言い換えれば、「学習の対象となる音楽に対して多くの人が共通に認識しているような普遍的なよさや特徴などを学習し、その上で、自分にとっての大切さや意味を考えていくこと」（大熊2013）である。「多くの人が共通に認識しているような普遍的なよさや特徴」というのが、音楽を形づくっている要素（形式的側面：知覚）や音楽そのものの特質（内容的側面：感受）に当たり、「自分にとっての大切さや意味を考えていくこと」が音楽の価値を考えることであると捉えられる。また、教科・科目の目標である音楽文化の理解につなげるためには、楽曲の背景（文化的側面：知識）を音楽と関わらせて理解することも重要となる。

以上のように、音楽を形づくっている要素や音楽の特質と楽曲の背景とを関わらせながら、自分にとっての音楽の大切さや意味を思考し判断することが、本研究における「価値判断」である。

2 「創造的アプローチ」の内容

(1) 知覚・感受に関するアプローチ

① 他の楽曲との比較聴取

比較という行為は、「二つないしは三つ以上の対象を種々の観点から観察することで、類似性ないし同一性、および差異性を明らかにすること（日本大百科全書）」である。鑑賞における「比較聴取」では、学習対象となる楽曲の音楽を形づくっている要素や要素同士の関わりなどの音楽的特徴を明らかにすると考える。

上記の比較の観点から、比較聴取する楽曲については、例えば、共通する表現形態による異なる楽曲、同時代の別の作曲家の楽曲、共通する歌詞をもつ楽曲などの、学習対象となる楽曲との共通点と相違点の両方を併せ持つ楽曲が望ましい。実際の学習の場面においては、主として相違点が学習で扱う音楽を形づくっている要素となることが考えられる。

② 自分の声や音による再現

再現という行為は、「現実の対象に似た像をつくること（日本大百科全書）」であり、模倣と言い換えることができる。鑑賞における「再現」では、主として声や音の音色や旋律のリズム、楽曲の速度、強弱についての知覚・感受が促されると考える。

また、例えば、オーケストラの作品の一部をピアノなどで演奏することは、音域を変えて再現することで、音色だけでなく旋律やテクスチャの知覚に基づき、音域の違いによる声部の働きの感受を促すことなども可能である。

③ 聴き取ったことの視覚化

視覚化という行為は、「目に見えない抽象的なことを、見てわかるような形に示すこと（デジタル大辞泉）」である。音や音楽は目に見えないものであり、それらをどう知覚・感受しているかも元来は目に見えないものである。鑑賞における「視覚化」では、線や手の動きを用いて旋律の動き（高低）や強弱を表したり、色の異なる付箋を用いて楽曲の構成や形式を図示したりすることなどにより、知覚・感受が促されると考える。

視覚化することは、知覚・感受した音楽の性質を端的に表すだけでなく、④の共有と関連して、音楽の性質を他者と共有しやすくするものでもある。

④ 知覚・感受の内容の共有と再鑑賞

共有（情報共有）という行為は、「見聞や知識、ノウハウを、仲間に伝達し共有すること（実用日本語表現辞典：【情報共有】の項）」である。鑑賞における「共有」と「再鑑賞」では、生徒が知覚・感受した内容を互いに伝達し合い、それらを視点として再び鑑賞することによって、知覚・感受が再度促されると考える。自身の知覚・感受したことを振り返りながら鑑賞するとともに、他者が知覚・感受した音楽を形づくっている要素を視点にさらに知覚・感受を深めていくことは、互い

の考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させ、音楽の質的世界を広げ、感性を高めることにつながる。

このような、知覚・感受に関するアプローチを用いて鑑賞することは、鑑賞の学習を受動的なものから主体的なものへと転換するだけでなく、生徒の音楽の質的世界を広げ感性を高める学習へと発展させていくと考える。

(2) 価値判断に関するアプローチ

価値判断に関するアプローチは、音楽を形づくっている要素（形式的側面：知覚）や音楽そのものの特質（内容的側面：感受）を根拠として、楽曲の背景（文化的側面：知識）と関わらせながら音楽のよさや美しさ、自分にとっての音楽の大切さや意味を思考し判断する際の問いである。

その問いは、創造的な鑑賞の趣旨から、以下の三つの要件を備えたものである必要があると考える。

- 音楽のよさや美しさについて思考を促す問い
- 楽曲の背景に関する理解や活用を促す問い
- 知覚・感受した要素を根拠として用いる必然性のある問い

以上の要件を備えた問いに対する生徒の思考・判断は、楽曲の背景を関わらせながら、知覚・感受した音楽を形づくっている要素を根拠として、音楽のよさや美しさ、自分にとっての音楽の大切さや意味を思考・判断することであり、対象となる楽曲の背景にある音楽文化に関する意識を高めることにつながると考える。

3 先行研究とのつながり

(1) 「資質・能力育成のための授業や教育課程編成の視点」との関係

国立教育政策研究所による『教育課程の編成に関する基礎的研究7』（2014）の第5章第4節では、資質・能力育成のための授業や教育課程編成の視点として七つの提案がされている。本研究ではそのうちの4点を参考にしており、「創造的アプローチ」との関係は以下のように整理することができる（表1）。

表1 授業や教育課程編成の視点と「創造的アプローチ」との関係

創造的アプローチ	資質・能力育成のための授業や教育課程編成の視点
知覚・感受に関するアプローチ	2 子供から引き出す考えの多様性
	3 考えを深めるための対話活動の導入
	4 考えるための材料の提供
価値判断に関するアプローチ	1 学びの文脈を創る意味のある問いや課題

(2) 価値判断と批評に関する先行研究

本研究の先行研究としては、宮下俊也による「音楽鑑賞教育における批評能力育成プログラムの開発」（2013）と、宮下・大熊による「ESD（持続発展教育）としての音楽科教育－中学校鑑賞領域の場合－」（2013）が挙げられる。

宮下（2013）の特徴として、中学校の鑑賞における活動を、「見つける」「考える」「生み出す」「拡げる」の四つの過程・展開に分類し、「生み出す」までをステージ1、「拡げる」までをステージ2としている。ステージ1は、「批評の構造のすべてのプロセスに相当し、批評文を作成するまでを示す」と定義されており、本研究で目指す価値判断もこれに倣うものである。

また、宮下・大熊（2013）は、中学校音楽科鑑賞領域の指導内容によりESDとして獲得が期待できる力・獲得までの段階・獲得のために思考させるテーマについて示している。

このように、中学校における音楽鑑賞の指導について、指導事例という形で研究がなされているが、いずれも、主として音楽を批評する際のテーマに視点を置いた研究であり、特に音楽を形づくっている要素の知覚・感受の工夫について、本研究では補完したい。

4 音楽鑑賞における課題

(1) 従前の音楽鑑賞における課題

日本学校音楽教育実践学会第18回全国大会の口頭発表において、宮下は従前の音楽鑑賞における課題として、以下の3点を挙げている。

- ① 聴いた音楽に対して、漠然とした感想を述べることにとどまっていること（無目的）
- ② 子どもが、音楽についての自分の感じ方・考え方を述べ合うことの意味が見いだせないこと（無用感）
- ③ 楽曲の特徴や音楽の背景となる文化や歴史などの知識を得ることと、主体的・創造的に音楽を聴くことが結び付かないこと（鑑賞活動と切り離された知識）

指摘された課題のうち、②については本研究における知覚・感受に関するアプローチが、①・③については価値判断に関するアプローチが解決策として対応するものと考えられる。

(2) 本県の音楽鑑賞における課題

群馬県高等学校教育研究会音楽部会が、平成26年度に県内の音楽教諭を対象に実施した鑑賞の学習指導に関する質問紙調査によると、「音楽Ⅰ」における指導事項ア、ウ、エを指導する際、「エ 我が国や郷土の伝統音楽の種類とそれぞれの特徴を理解して鑑賞すること」は80.0%の回答を得られた。これは、学習指導要領の改善の基本方針の四つ目に、「我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着を持つとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする」と示されていることを、県内の音楽教諭が重視していることがうかがえる。つまり、我が国や郷土の伝統音楽を鑑賞し、その音楽の中に自分自身のよりどころを見いだすことは、国際化が進んだ現代社会において、自国の音楽文化の理解から他国の音楽文化の理解へ、また多様な音楽文化の理解へと発展する礎となるということ、本県の音楽教諭は大いに意識しているということが言える。

しかし、この結果に反して、これに続く、指導しやすいと感じている順（生徒に理解させやすい順）を問う質問では、エの指導事項を最も指導しやすい（生徒に理解させやすい）とする回答は5.0%にすぎなかった。

これらの結果を実際の授業の姿として考えた場合、我が国や郷土の伝統音楽の指導を重視している反面、特に宮下が挙げた③の課題が発生している可能性が考えられる。つまり、楽曲の特徴を捉えるための音楽を形づくっている要素の知覚・感受の学習活動と、音楽の背景である文化や歴史などの知識とを適切に結び付けるに至っていない可能性である。我が国や郷土の伝統音楽の指導の一層の充実を図ろうとする際、指導者が課題と感じる点はこの点であると考えられる。様々な研修会が催されたり、教諭同士の情報交換がなされたりしているが、多くの音楽教諭が西洋音楽を専門とするため、我が国や郷土の伝統音楽を適切に指導できる経験や知識が不足している現状である。

以上、これまで挙げた、授業や教育課程編成における視点や音楽鑑賞における諸課題と、「創造的アプローチ」との関係を整理すると、以下の表ようになる（表2）。

表2 音楽鑑賞における課題等と「創造的アプローチ」との関係

創造的アプローチ	授業や教育課程編成の視点	音楽鑑賞の諸課題
知覚・感受に関するアプローチ	2 子供から引き出す考えの多様性 3 考えを深めるための対話活動の導入 4 考えるための材料の提供	② 無用感
価値判断に関するアプローチ	1 学びの文脈を創る意味のある問いや課題	① 無目的 ③ 鑑賞活動と切り離された知識

(3) 事前調査において明らかになった課題

本研究の検証授業の実践に当たり、実態を把握するため、組曲『展覧会の絵』より「プロムナードⅠ～Ⅳ」（M. ムソルグスキー作曲／M. ラヴェル編曲）を鑑賞する1時間の調査を7月に実施した。

なお、この調査までに、鑑賞領域の題材は実施していない。

本調査は、学習指導要領の「B鑑賞」の指導事項ア「声や楽器の音色の特徴と表現上の効果とのかかわりを感じ取って鑑賞すること」を指導する授業形式の調査であり、一般的なワークシート形式の質問紙の分析によって実態を把握した。主な学習活動は、同一の旋律を基とする4曲の「プロムナード」を聴取し、その共通点である「旋律」と相違点である「音色」「速度」「強弱」を知覚・感受し、気に入った1曲を選び、他の曲と比較しながら音楽を形づくっている要素を根拠にそのよさや美しさを紹介するものである。特に設問2については、音楽鑑賞の題材の終末において一般的に用いられる紹介文の形式により、楽曲に対する価値判断を促すものである（表3）。

表3 事前調査の設問

設問1	四つの曲に共通する事柄として、どんなことに気付きましたか。	(知覚・感受)
設問2	設問1に書いた以外に聴き取ったことも用いて、 他の曲との比較しながらあなたが気に入った曲を紹介してください。	(知覚・感受) (価値判断)

事前調査の結果、82.6%の生徒が4曲の「プロムナード」に共通する旋律を知覚・感受し、さらに、72.9%の生徒が旋律を含む二つ以上の音楽を形づくっている要素の知覚・感受をしながら楽曲を聴取していることが分かった。この理由として、知覚・感受のために4曲を各2回聴取したこと、また、4曲の演奏時間が約40秒～2分30秒という短い楽曲であることから、楽曲の特徴や特質を端的に捉えやすい状況であったことが考えられる。

しかし、知覚・感受した音楽を形づくっている要素を基に記述する設問2において課題が見られた。気に入った1曲を選び、知覚・感受した音楽を形づくっている要素を根拠として選んだ理由を述べる際、「設問1に書いた以外に聴き取った要素」「他の曲と比較しながら」という二つの条件を満たして記述した生徒は9.0%、どちらか一方の条件のみ満たした生徒が34.7%で、批評文中の音楽を形づくっている要素の個数は、一人当たり1.9個であった。

5 研究構想図



V 研究の計画と方法

1 授業実践の概要

対 象	県立高等学校 第1学年 155名
実践期間	平成26年10月10日～10月23日 12時間
題 材 名	「日本の伝統をつたえる」京鹿子娘道成寺に見る日本の伝統
題材の目標	『京鹿子娘道成寺』の鑑賞を通して、我が国の伝統音楽における声の音色の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取ったり、謡曲、義太夫節、長唄などの音楽の特徴を理解したりして、歌舞伎の音楽が、能や文楽などの音楽の影響を受けながら、江戸の町民文化として発展し、今日まで続いていることを理解して鑑賞する。

2 検証計画

項目	検証の観点	検証の方法
研究仮説1	音楽を形づくっている要素の知覚とその働きの感受において、比較聴取や視覚化などの音楽を形づくっている要素を知覚・感受させるための学習活動である「知覚・感受に関するアプローチ」を設定することによって、生徒自身が音の組み合わせの特徴を捉える学習となっているか。	○ ワークシート (Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ)
研究仮説2	知覚・感受した音楽を形づくっている要素と音楽のよさや美しさを結び付け、楽曲の背景と関わらせて批評する場面において、知覚・感受した音楽を形づくっている要素と音楽のよさや美しさを結び付けて価値判断するための適切な問いである「価値判断に関するアプローチ」を設定することによって、音楽を形づくっている要素の知覚・感受を根拠とした自分なりの価値判断ができ、創造的に鑑賞する学習となっているか。	○ ワークシート (Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ)

3 評価規準

評 価 規 準	音楽への 関心・意欲・態度	①我が国の伝統音楽の声の音色の特徴と表現上の効果との関わり、楽曲の文化的・歴史的背景、謡、義太夫節、長唄のそれぞれの特徴に関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。 ②歌舞伎の音楽が、能や文楽などの音楽の影響を受けながら、江戸の町民文化として発展し、今日まで続いていることを理解して鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。
	鑑賞の能力	①謡、義太夫節、長唄の音色、リズム、旋律、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、それぞれの音楽の特徴を理解して聴いている。 ②『道成寺』と『京鹿子娘道成寺』のそれぞれの音色、リズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、声の音色の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取り、謡、長唄のそれぞれの特徴についての理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。 ③音色、リズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、『京鹿子娘道成寺』の文化的・歴史的背景を理解したり、自分にとっての楽曲の価値を考えたりして、我が国の伝統的な音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。

4 指導計画

時間	過程	伸ばしたい資質・能力		主な学習活動における「創造的アプローチ」 (<u>知覚・感受</u> 、※ <u>価値判断</u>)と【 <u>評価規準</u> 】
		活用させたい知識等	思考力・表現力等	
第1時	課題把握	・義務教育段階で学んだ日本の音楽のイメージ	・自分の考えを表現する力	・能(謡)、文楽(義太夫節)、歌舞伎(長唄)の音楽のイメージを持つ。 ・謡、義太夫節、長唄を <u>比較し、それぞれの特徴を聴き取る(比較聴取)</u> 。【 <u>関①</u> 】
第2時	課題追求①	・前時で聴き取り、感じ取った謡、義太夫節、長唄、それぞれの特徴 ・前時で理解した能、文楽、歌舞伎の成立の歴史 ・前時で理解した三味線の伝来に関する知識	・能、文楽、歌舞伎の成立の歴史とそれぞれの音楽の特徴とを関連させて思考する力 ・自分の考えを支える理由を考える力 ・自分の考えを表現する力	・前時で知覚・感受した音楽を形づくっている要素など、 <u>音楽の特徴を発表し合い、再度鑑賞する(共有・再鑑賞)</u> 。 ・『京鹿子娘道成寺』の中の <u>二つの場面の音楽を視聴し、それらを比較しながら謡、義太夫節、長唄のどれに似ているかを音楽的な特徴から考える(比較聴取)</u> 。 ※ <u>能、文楽、歌舞伎が発展した時代や地域、担い手(文化的・歴史的背景)とそれぞれの音楽の特徴とは、どんな関連があるか、聴き取ったことや見たこと、得た知識などを基に仮説を立ててみよう</u> 【 <u>鑑①</u> 】
第3時	課題追求②	・第1時で聴き取り、感じ取った謡、義太夫節、長唄、それぞれの特徴 ・第1時で理解した能、文楽、歌舞伎の成立の歴史 ・第1時で理解した、三味線の伝来に関する知識	・能の謡と歌舞伎の謡ガカリを比較し、その特徴を記述する思考力・表現力 ・音楽的な特徴と表現上の効果との関わりについて、歌舞伎の作者の立場で思考する力 ・自分の考えを支える理由を考える力 ・自分の考えを表現する力	・能と歌舞伎の場面を比較しながら視聴し(<u>比較聴取</u>)、楽曲の雰囲気や声や楽器の音色を知覚・感受する。 ・ <u>謡と謡ガカリを歌ったり(再現)、歌ったことを通して線や記号で表現したり(視覚化)</u> して、音楽的な特徴と表現上の効果との関わりについて、自分なりの意見を持ち、クラス全体で交流する。 ※ <u>『京鹿子娘道成寺』の謡ガカリと[乱拍子]にどんな工夫をしたか、Vで聴き取ったことや感じ取った効果を中心に、あなたが作者になったつもりで考えてみよう</u> 【 <u>鑑②</u> 】
第4時	まとめ	・第1時で理解した能、文楽、歌舞伎の成立の歴史 ・歌舞伎の長唄に能の謡や文楽の義太夫節、流行歌や民謡の要素が含まれていること	・聴き取ったことを基に、長唄のよさを思考し、表現する力 ・歌舞伎が江戸の町民文化として愛されるようになったことについて、その考えを支える理由を思考する力	・『京鹿子娘道成寺』全体の流れをダイジェストで鑑賞し、長唄の特徴を能の謡と比較しながら価値判断する。 ※ <u>能の謡と比較しながら長唄の特徴を説明しよう</u> 【 <u>関②</u> 】【 <u>鑑③</u> 】 ・歌舞伎のよさや美しさについて、自分なりの価値判断をし、創造的に味わって聴く。 ※ <u>『京鹿子娘道成寺』が江戸時代から庶民に愛され、現在まで250年以上も上演され続けている理由を考え、具体的な場面を挙げて書こう</u> 【 <u>関②</u> 】【 <u>鑑③</u> 】

VI 研究の結果と考察

1 知覚・感受に関するアプローチについて

(1) 第1時における知覚・感受に関するアプローチ（比較聴取：ワークシートⅡ）

① 結果

題材の導入となる第1時では、能や文楽、歌舞伎のそれぞれの特徴的な音楽である謡、義太夫節、長唄を比較しながら聴き、音色、リズム、旋律を中心とする音楽を形づくっている要素の知覚・感受を促して、ワークシートⅡに個別に記入した（図1）。

舞台芸術の種類	室町～戦国/安土桃山	江戸時代
A 能 (謡(うた)) 京(武楽) 中心	『羽衣』(室町後期) 声や楽器 雰囲気	武楽となる 白く、ピリッとした空気感、小じんまりとした
B 文楽 (義太夫節) 大津(町長) 中心	声や楽器 雰囲気	『義経千本桜』 三味線、歌に合っている、声が高い、 華やかさを感じ、拍子もびくびくする感じ

図1 第1時で生徒が知覚・感受した内容（一部）

ここで比較した能、文楽、歌舞伎の演目は、それぞれ『羽衣』より白龍の名ノリと天女の舞の場面、『義経千本桜』の道行初音旅より道行の場面、『勸進帳』の「ついに泣かぬ弁慶も」の長唄の場面である。これらはそれぞれ謡、義太夫節、長唄の歌と囃子や三味線で構成されている点が共通している。ここでは、三つの芸能の音楽的な特徴や雰囲気をつかえることが学習の目標であるため、三つの芸能のそれぞれの演目が主教材であり、相互に比較聴取の対象となる。

ワークシートⅡに記述された音楽を形づくっている要素は、生徒153名の総計で1142個であり、そのうち音色の総数は781個であったことから、比較聴取においては、音色を中心として知覚・感受が促されることが分かった（表4）。また、リズムは189個、旋律は172個というほぼ同数の結果となった。

表4 比較聴取により知覚・感受された音楽を形づくっている要素

音楽を形づくっている要素	音色	リズム	旋律
知覚・感受した総数	781	189	172
生徒一人当たり	5.1	1.2	1.1

しかし、比較聴取によって知覚・感受された音楽を形づくっている要素を個数別の人数で調べたところ、リズムと旋律についての知覚・感受の状況が記述に見られなかった生徒がそれぞれ37名ずつ存在した（図2）。そのうち、リズムと旋律のどちらについても記述が見られなかった生徒が7名という結果であった。

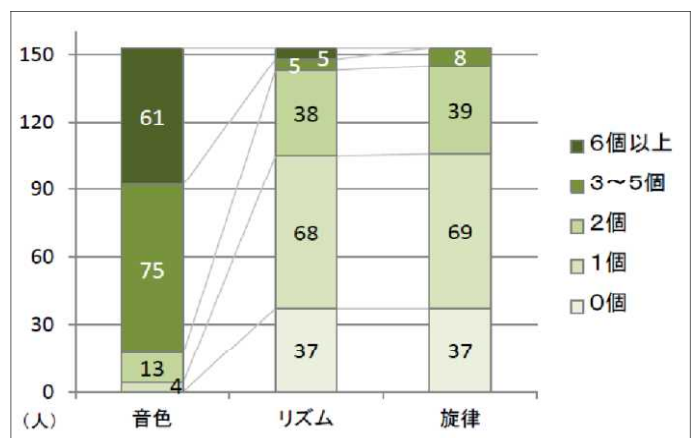


図2 比較聴取によって知覚・感受された音楽を形づくっている要素の個数別人数

② 考察

音楽はしばしば「音による芸術」と定義されることから、音楽を鑑賞するという行為において、第一に捉えられるものは音そのものの質感、つまり音色であると言えるだろう。このことを踏まえて考えると、第1時における比較聴取において、音色を中心に知覚・感受がなされたことは、極めて自然なことであり、音色を中心とする学習展開となったと考える。特に、教材として扱った謡、義太夫節、長唄を含む我が国や郷土の伝統音楽は、音そのものや音楽全体の音色にその音楽の意味を持たせ、重視する傾向がある。そのため、鑑賞の題材で我が国や郷土の伝統音楽を取り上げる際、比較聴取や比較鑑賞によって音色を知覚し、その働きを感受する活動は、我が国の伝統音楽や郷土の音楽のよさや美しさに迫りやすくする手立てであると考えられる。

(2) 第2時における知覚・感受に関するアプローチ（共有と再鑑賞：ワークシートⅢ）

① 結果

第2時では、共有と再鑑賞によって前時の学習を振り返りながら、本時の学習へと発展させた。

具体的には、第1時で知覚・感受した音楽を形づくっている要素などの音楽的な特徴を発表し合い、再鑑賞するとともに、その経験を生かして『京鹿子娘道成寺』の中の二つの場面の音楽を視聴し比較して、謡、義太夫節、長唄のどれに似ているかを音楽的な特徴から考える学習を行った。ここで扱った『京鹿子娘道成寺』の中の二つの場面は、「道行」と「クドキ」の場面であり、それぞれ義太夫節（歌舞伎においては竹本と呼ばれる）と長唄が使用されている。

知覚・感受された音楽を形づくっている要素は総計で741個であり、第1時に比べると減少しているが、共有と再鑑賞による成果は、知覚・感受した内容の質的高まりや、音楽を形づくっている要素の割合の変化から見る事ができる。

第1時における知覚・感受の記述が「にぎやか」「言葉が伸びている」「こもった声」などの簡単な表現であったのに対し、知覚・感受した内容を共有し、再鑑賞したことで「コブシのある力強い地声」「音と音の間が切れていて軽やかな三味線のリズム」などの記述へと質的な高まりが見られた（図3）。

聴く視点		第一段【道行】
声	音色・リズム・音のつながりなど	こぶしが入っている。はじめて聴く時は著わっている。声が高かったり低かったりする。中には滑りやすい。
楽器	音色・リズム・音のつながりなど	太鼓。笛。一時楽器がやむと、太鼓が三味線のリズム速い。入った笛が入る。
声に対する楽器の役割		音の速さになみがあり、それと共に声の速さも変化している。

図3 第2時で生徒が知覚・感受した内容（一部）

また、音楽を形づくっている要素の割合については、第1時におけるリズムや旋律の割合がそれぞれ全体の15%程度であったのに対し、前時の内容を共有と再鑑賞を経て、それを視点にすることで、それぞれ31.3%と22.8%と上昇した（図4）。

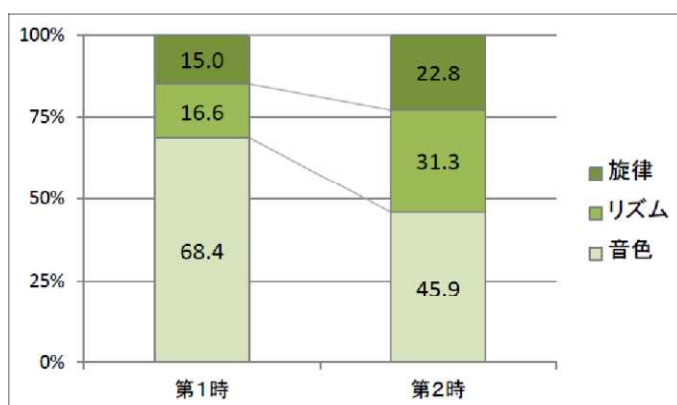


図4 知覚・感受された音楽を形づくっている要素の割合

これらの結果、「道行」と「クドキ」の音楽が謡、義太夫節、長唄のどれに似ているかという判断において、それぞれの音楽的な特徴を基に、155人中

140人が「道行」の竹本と文楽の義太夫節を、103名が長唄同士を適切に結び付けることができた。

② 考察

知覚・感受に関するアプローチとして、知覚・感受した内容を学級全体で共有し、再鑑賞したことは、鑑賞した音楽について自らが知覚・感受したことだけでなく、他者が知覚・感受したことも含めて再鑑賞の視点とすることであり、結果に見られたとおり、まさに音楽の質的世界を広げ、感性を高める学習活動となった。また、従前の音楽鑑賞における課題として挙げられていた「子どもが、音楽についての自分の感じ方・考え方を述べ合うことの意味が見いだせないこと（無用感）」に対する、本研究における解決策の一つと言える。

また、自らが知覚・感受したことを意識しつつ、他者が知覚・感受したことも含めた視点とすることは、自己理解や他者理解を図る活動にもなったと考えられる。

(3) 第3時における知覚・感受に関するアプローチ（再現と視覚化 ワークシートV）

① 結果

第3時では、歌舞伎『京鹿子娘道成寺』の第三段「謡ガカリ・乱拍子」を鑑賞するに当たり、能『道成寺』の「謡・乱拍子」と比較聴取するとともに、生徒自身の声による再現と聴き取ったことの視覚化を組み合わせて実施した。比較する謡ガカリと謡は「花の外には松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん」という共通の詞章を含み、またそれに続く乱拍子も主役と小鼓方による舞の場面という点で共通している。手順としては、「謡・乱拍子」、「謡ガカリ・乱拍子」の順に2回視聴し、その雰囲気を感じた後、前時までに知覚・感受した「音楽を形づくっている要素」である「音色」「リズム」「旋律」に加え、「速度」を比較鑑賞の手掛かりとし、能の謡や歌舞伎の謡ガカリをまね

して歌ったり、謡と謡ガカリの音の高さや音のつながり方を示す線や記号を用いたりして、それぞれの特徴を分析的にまとめた(図5)。

第1時から第2時へと音色の知覚・感受の総数は減少していたが、自分の声で再現すること、つまり歌うことにより、第2時に比べて知覚・感受される音色の個数が大幅に増加した。特に、音色の知覚・感受が0～2個だった生徒が大幅に減少し、3～4個知覚・感受した生徒が倍増したことで、グラフの頂点は右に移動した(図6)。この結果、音色に関する知覚・感受は、第2時の平均2.2個から第3時は平均3.4個へと増加した。

また、聴き取ったことを視覚化する活動では、謡や謡ガカリの旋律に対する知覚が促され、その様子を線や記号を用いて視覚化する活動を通して、「あまり変わらない一定の音(謡)」「一つの言葉で高さがいくつも変わる(謡ガカリ)」「詞章の最後の言葉が高くなったり、余韻が残ったりする(謡ガカリ)」など、旋律の働きを感受し、その違いを認識したり、共有したりすることができた。結果的に、全ての生徒が旋律の知覚・感受をすることができた。

② 考察

ここでは、三つの知覚・感受に関するアプローチが組み合わせられている。謡ガカリの特徴を捉えるため、謡ガカリの元となった謡と比較聴取する活動の上に、旋律を実際に生徒が歌い、音の高さや音のつながり方をワークシートに線や記号を用いて視覚化して書き表したことである。このため、謡と謡ガカリ、それぞれの音楽的な特徴を捉えやすくなり、上記の結果に結び付いたと考える。特に、旋律については、知覚・感受の状況が記述に見られなかった生徒が第1時が37名、第2時が41名であったのに対して、第3時で全ての生徒が旋律を知覚・感受できたのは、対象となる音楽の旋律を視覚化するという意識を持つことで、それまで漠然としていた旋律という概念に主体的・能動的に関わる学習活動となったことにあると考える。

2 価値判断のテーマに関する研究

(1) 価値判断に関するアプローチの検証方法について

価値判断のアプローチについては、以下の二つの観点で検証する。

- ① 価値判断の批評文において知覚・感受した要素が盛り込まれている個数
- ② 観点別学習状況の評価として、評価規準に照らした際の学習状況

(2) 第2時における価値判断に関するアプローチ(価値判断1:ワークシートIV)

① 結果

第2時の終わりには、比較聴取によって知覚・感受された音色、リズム、旋律などの音楽を形づくっている要素を基に、能、文楽、歌舞伎の文化的・歴史的背景とそれぞれの音楽の特徴との関連について、自分なりの仮説を立てるという形での価値判断を行った。具体的な問いとしては「能、文楽、歌舞伎が発展した時代や地域、担い手(文化的・歴史的背景)とそれぞれの音楽の特徴とは、

①声の雰囲気・印象
低く暗い声。一人の力強い声。堅い感じ。 舞【乱拍子】の雰囲気・印象
動きが少なくて静かさが感じられる。

②声の音色・速度
低く暗い声でゆっくり強い。一人の声が会場へ響き、静かさがあがる。

③音の高さ・つながり方
シテ
はな ほか ほか
花の外には松ばかり 花の外には松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん

①声の雰囲気
能に比べて高く明るい声。大勢で歌っていてさやが 能に比べて明るく響く感じ。
わやわやの感じ。

②声の音色・速度
明るく少し速い。声がそろってきれい。一つの言葉で高さがいくつも変わる。
(声や曲)

③音の高さ・つながり方
唄方
花の外には松ばかり 花の外には松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん

図5 再現したことを基に視覚化しているワークシート

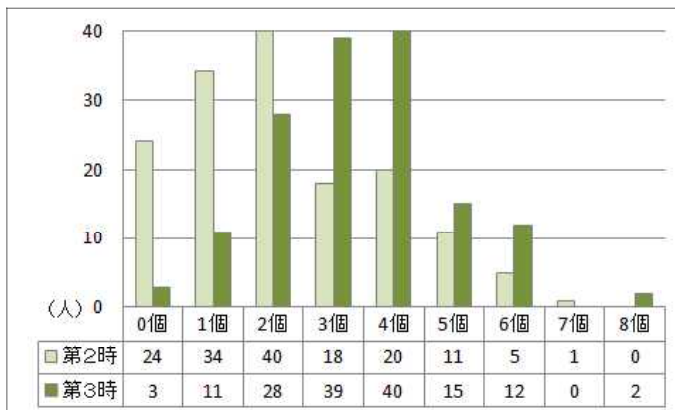


図6 音色を知覚・感受した人数(第2時と第3時の比較)

どんな関連があるか。聴き取ったことや見たこと、得た知識などを基に仮説を立ててみよう」というものである。

価値判断の批評文における知覚・感受された音楽を形づくっている要素の個数を人数別に整理したところ、図7のような結果となった。

また、観点別学習状況の学習評価として、各芸能の成立の歴史や三味線の伝来という第1時で得た文化的・歴史的背景に関する知識と音楽的な特徴とを関連付けて述べているものを、おおむね満足できる状況（以下、B評価）とし、それに加えて、武家の精神性や町民の嗜好にまで思いを馳せて述べているものを十分満足できる状況（以下、A評価）とした（図8）。

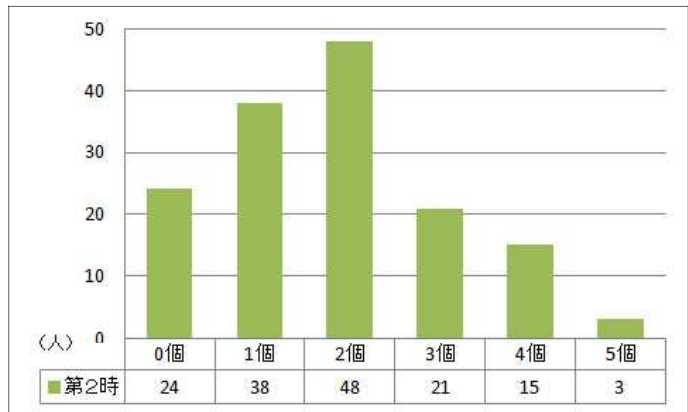


図7 批評文中の音楽を形づくっている要素の個数（第2時）

京都で発展した能は武家中心だったことから武家は雰囲気の中に入り込めるのが好きなのかなと思った。大阪や江戸で発展した文楽や歌舞伎は町人中心だったことから町人が好む舞台はにぎやかで華やかなものだと分かった。

図8 A評価の記述例（第2時）

その結果、生徒 155名の批評文のうち、B評価の割合は41.2%、A評価の割合は38.6%となった。

② 考察

この時間の価値判断に関するアプローチの問いは、学習指導要領の指導事項から二つの事項を組み合わせたものである。それは、事項ウの前半にある「楽曲の文化的・歴史的背景」とエの「我が国の伝統音楽の種類とそれぞれの特徴」であり、この二つがどのように関連しているかについて、知覚・感受したことを基に仮説を立てた。仮説を立てるという形をとったことで、生徒は比較的自由に思いを巡らせることにつながったと同時に、そこに「聴き取ったことや見たこと、得た知識など」という条件を付けたことにより、多くの生徒が本時の目標から逸脱することなく価値判断ができたと考えられる。

(3) 第3時における価値判断に関するアプローチ（価値判断2：ワークシートVI）

① 結果

第3時の終わりには、比較聴取に基づき再現したり視覚化したりしたことによって知覚・感受された音色、速度、旋律などの音楽を形づくっている要素を基に、歌舞伎の作者が、能の謡を取り入れながら謡ガカリにするに当たり、どのような工夫をしたかについて、作者の立場に立って価値判断を行った。具体的な問いとしては「『京鹿子娘道成寺』の謡ガカリと[乱拍子]にどんな工夫をしたか、Vで聴き取ったことや感じ取った効果を中心に、あなたが作者になったつもりで考えてみよう。舞踊、衣装などの音楽以外の芸術的要素も含めて考えてみよう」というものである。

価値判断の批評文における知覚・感受された音楽を形づくっている要素の個数を人数別に整理したところ、図9のような結果となった。

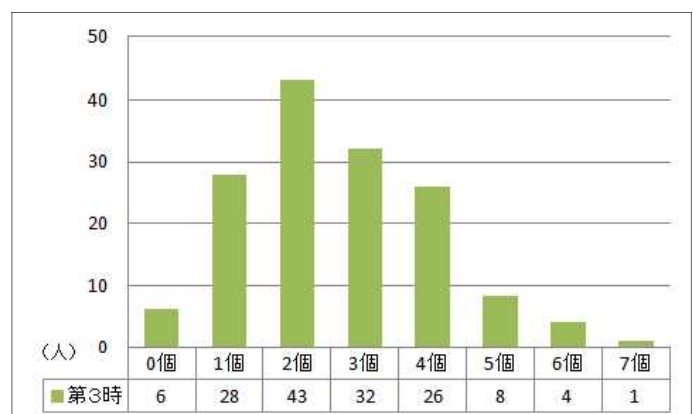


図9 批評文中の音楽を形づくっている要素の個数（第3時）

また、観点別学習状況の学習評価として、「江戸の町民文化」や「謡」「謡ガカリ」などのそれまでに獲得した楽曲の背景に関する知識を活用しながら、能の謡と舞に基づく歌舞伎の謡ガカリと舞にどのような効果があるかを述べているものをB評価とした。また、「作者は、歌舞伎の華やかさと能の落ち着いた雰囲気とうまく合わせている。一見、歌舞伎の要素が強いような気もするけど、能独特の間を

大事にしている。華やかな歌舞伎の方が人気になっているが、能の文化を残したいという気持ちがあるので「作者は、速度を速くし、歌の声のトーンを高く、音量を上げることによって、謡ガカリに華やかさや明るさを出している。江戸の華やかで明るい町民文化を表現していると思う」の傍点部で示したように、価値判断の批評文中に歌舞伎の作者の意図を理由として含めながら述べているものをA評価とした(図10)。

作者は、歌舞伎は能よりも明るく、やわらかい感じにしたから踊る人の衣装を明るく、ハテにして、謡ガカリも太鼓でしなやかに、そして声を高くした。打踊りも能のように小さい動きで迫力があるのではなく、もう少し変化のある、何めらか動きにした。言葉も、される所を少なくし、速度を遅めた。

図10 A評価の記述例(第3時)

その結果、生徒155名の批評文のうち、B評価の割合は51.6%、A評価の割合は32.9%となった。

② 考察

この時間の価値判断に関するアプローチの問いは、学習指導要領の指導事項アの「声の音色の特徴と表現上の効果とのかかわり」に関するものである。

第2時の価値判断におけるB評価よりも約10ポイント上昇したのは、価値判断を促す問いに、知覚・感受した音楽を形づくっている要素を根拠として用いる必然性を含んでいるからであると考えられる。つまり、謡を取り入れ謡ガカリへとするにあたり作者がどのような工夫をしたかを考えることは、知覚・感受した音楽を形づくっている要素を基に、能と歌舞伎の音楽のそれぞれの特徴や、それらの表現上の効果の違いに着目することから価値判断が始まるからである。

価値判断に関するアプローチである問いによって、知覚・感受された音楽を形づくっている要素(生徒一人当たり6.3個)は、生徒の思考の中で整理・統合され、学習目標に即した価値判断ができたと考える。

(4) 第4時における価値判断に関するアプローチ(価値判断3:ワークシートⅦ-①・②)

① 結果

題材のまとめとして、『京鹿子娘道成寺』の全体をダイジェストで視聴し、能の謡や文楽の義太夫節以外に、民謡や当時の流行歌が含まれていることを理解した。その後、再び視聴し、音楽的な特徴だけでなく、舞台の様子や衣装などの美術的要素も含めて鑑賞した。そして、価値判断3の前半(ワークシートⅦ-①)では、謡と比較しながら長唄の特徴について説明を求めるとともに、後半(ワークシートⅦ-②)では、総合芸術としての歌舞伎のよさや美しさについて価値判断を促した。具体的な問いは「①能の謡と比較しながら長唄の特徴を説明しよう。②『京鹿子娘道成寺』が江戸時代から庶民に愛され、現在まで250年以上も上演され続けている理由を考え、具体的な場面を挙げて書こう」である。

価値判断の批評文における知覚・感受された音楽を形づくっている要素の個数を人数別に整理したところ、図11のような結果となった。

観点別学習状況の学習評価として、ワークシートⅦ-①については、謡と比較しながら長唄の特徴について自分なりの意見や音楽のよさや美しさを述べる際、これまでの3時間を通じて知覚・感受してきた音楽を形づくっている要素である音色、リズム、強弱、旋律

の4種類からを2種類を組み合わせているものをB評価とし、3種類以上組み合わせているものをA評価とした。また、ワークシートⅦ-②については、

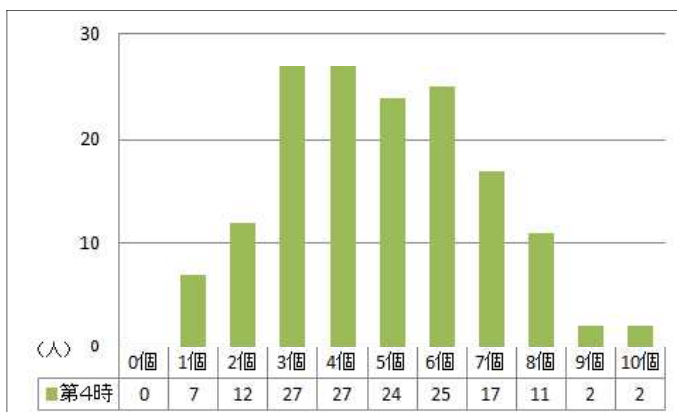


図11 批評文中の音楽を形づくっている要素の個数(第4時)

① 能は、低い声でゆっくりとか強く歌われていて、堅い感じだけど、長唄は速度は遅めな部分が多く、何めらかい感じであった。能は言葉がとぎとぎであった。全体的に長唄の方が明るくしなやかな印象を受けた。長唄は言葉が少なかつたのは周りの声や音によって気持ちや様子が表現されるからだと思う

② 第三段、第八段のように踊りながら男将軍の事を思う気持ちがよく表現されていて、昔の人も、今の人も感じることが出来るように、突然できる共通の気持ちがあり、今日でも多くの人が愛されているのではないかと感じた。

図12 ①はA評価、②はB評価の記述例(第4時)

題材のまとめとして、長唄が、謡や義太夫節、民謡や流行歌などの、他の芸能や音楽から影響を受けているなどの楽曲の背景に触れていることを述べているものをB評価とし、加えて、総合芸術としての歌舞伎の要素である文学的・美術的要素に触れ、具体的な場面を挙げた際に、音楽的な特徴も含めて述べているものをA評価とした（前ページ図12）。

その結果、生徒 155名の批評文のうち、ワークシートⅦ-①のB評価の割合は58.4%、A評価の割合は29.9%となった。ワークシートⅦ-②のB評価の割合は63.6%、A評価の割合は22.1%となった。

② 考察

この時間の価値判断に関するアプローチの問いは、学習指導要領の指導事項エ「我が国の伝統音楽の種類とそれぞれの特徴」と、ウの前半にある「楽曲の文化的・歴史的背景」に関わるものである。

ワークシートⅦ-①において、能の謡と比較しながら長唄の特徴を説明することは、ワークシートⅡ（第1時）、ワークシートⅤ（第3時）の内容や、第3時において価値判断した経験を生かす問いであるとともに、知覚・感受した音楽を形づくっている要素を基に、謡と長唄の音楽のそれぞれの特徴に着目させるものである。それまでの学習で扱った4種類の音楽を形づくっている要素を複数用いて長唄の特徴を説明できた生徒が88.3%に昇ったことは特筆すべき結果である。

また、ワークシートⅦ-②については、題材の目標である、歌舞伎の音楽が、能や文楽などの音楽の影響を受けながら、江戸の町民文化として発展し、今日まで続いていることを理解して鑑賞しているかについての問いである。B評価については、歌舞伎の音楽が、能や文楽などの音楽の影響を受けていることを理解しているかを見取り、さらに、A評価については、江戸の町民文化として発展し、今日まで続いていること、つまり音楽文化についての理解を深めているかどうかを見取るものとなっている。ワークシートⅦ-①と②を比べると、②においてA評価の割合が減少しているが、全体の2割を超える生徒が歌舞伎を音楽や美術、文学的内容から総合芸術として捉えると同時に、音楽のよさや美しさにとどまらず、自分にとっての大切さや意味を思考し判断することができたのではないかと考える。

題材の最後の学習として、『京鹿子娘道成寺』の最後の場面である「鐘入り」までを鑑賞したが、全ての生徒が非常に高い関心を持って鑑賞している姿があり、まさに音楽文化についての意識が高まっている姿が見られた。

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

知覚・感受に関するアプローチについては、各アプローチの内容と結果、考察で述べたように、それぞれのアプローチが単独でも組み合わせられたものであっても、生徒が音楽の形式的側面や内容的側面を捉えることに大いに効果を発揮した。このように、知覚・感受に関するアプローチは、受動的であった鑑賞の学習を生徒自身が音の組み合わせの特徴を捉える学習へと変えたと言える。

さらに、価値判断の批評文中の知覚・感受された音楽を形づくっている要素の個数を調査した結果、生徒一人当たり、第2時は1.8個、第3時は2.6個、第4時は4.8個と、学習が進むにつれて増加していった（図13）。このように、価値判断に関するアプローチは、音楽を形づくっている要素の知覚・感受を根拠とする必然性を内包しながら

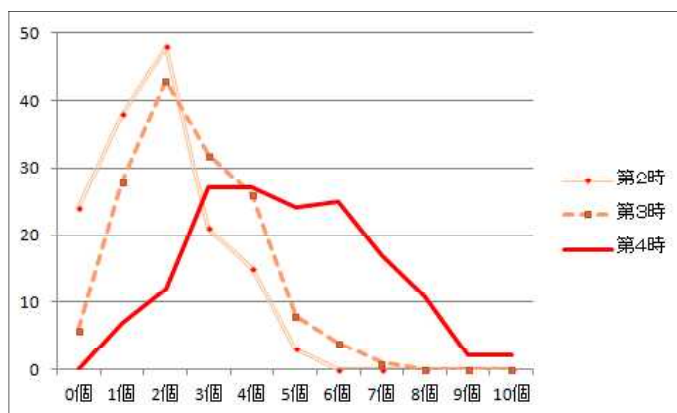


図13 批評文中の音楽を形づくっている要素の個数分布と変化

ら、生徒に対して自分なりの楽曲を価値判断を促すことができ、創造的に鑑賞する学習へと発展させることができたと考える。

また、事前調査における批評文中の音楽を形づくっている要素が、一人当たり 1.9個と、第2時の数値とほぼ同数であったことを考えると、価値判断を繰り返していく中で、生徒自身にとっての歌舞伎の音楽のよさや美しさを表現したいという気持ちが醸成されていったのではないかと考えることができる。

これらの結果を総合的に考察すると、音楽を形づくっている要素の知覚・感受について多様な角度からアプローチすることや、価値判断のテーマを楽曲の紹介文のみに限らず、指導内容に即したテーマにすることで、音楽教諭が扱い難いと感じている我が国や郷土の伝統音楽についても、多くの生徒がそのよさや美しさを味わうことができたと言える。

2 課題

研究の検証にあたり、音楽を形づくっている要素の数を中心とする知覚・感受に関するアプローチと、質を中心とする価値判断に関するアプローチというように、異なる視点で題材全体を検証した。その中で、対象生徒の多くは批評文中の知覚・感受された音楽を形づくっている要素の個数が増加しているものの、数名の生徒は、音楽を形づくっている要素の知覚・感受は数多くできているが、価値判断ではその音楽を形づくっている要素を根拠に価値判断を述べるには至らなかった。この理由としては、価値判断をする際に、スムーズな思考ができなかったのではないかと考える。音楽を形づくっている要素と求められている価値判断とを視覚的に結び付けやすく、直感的に捉えやすくするワークシートの改善が必要であると考えられる。

また、批評文中の知覚・感受された音楽を形づくっている要素の個数が増加したことが、自分なりの価値判断に慣れ、創造的な活動に慣れたと仮定すると、鑑賞領域の学習だけでなく、表現領域の学習においても、音楽を形づくっている要素の知覚・感受を根拠とし、生徒の気付きを十分に生かしながら指導を展開する、指導計画の作成も求められる。

VIII よりよい実践に向けて

1 知覚・感受に関するアプローチについて

四つの知覚・感受に関するアプローチを、題材における設定時期の観点で整理すると、「比較聴取」は、題材における初期の段階において、学習対象となる音楽を形づくっている要素を明確にしていく過程で有用であると考えられる。また、「再現」と「視覚化」は、知覚・感受の対象となる音楽を形づくっている要素にある一定の傾向が見られるため、題材の中盤「比較聴取」と関連付けた学習活動として設定することで、より一層の学習効果が期待できる。また、「共有と再鑑賞」は、ペア学習、グループ学習、一斉指導などの様々な学習形態の中で、学習の目的に応じて設定すると、知覚・感受を深めることについて効果的であると考えられる。

また、音楽を形づくっている要素の知覚・感受は全ての音楽活動を支えるものであるため、音楽を形づくっている要素の知覚・感受の工夫を通じて、生徒全員が何らかの音楽を形づくっている要素を知覚・感受できたことは、音楽鑑賞のみならず歌唱、器楽、創作の表現領域の学習においても有効に働くと考える。

具体的には、鑑賞領域での学習活動に、楽曲の一部を歌ってみてその音楽的特徴を捉える表現領域的活動を取り入れたように、表現領域の活動に、楽曲を分析的に聴取し、音楽的特徴を捉える鑑賞領域的活動を取り入れることが考えられる。

このように、題材における学習の段階や表現領域における音楽を形づくっている要素の知覚・感受の場面において活用していくことで、生徒一人一人の感性の高まりや音楽の質的世界の広がりが期待できると考える。

2 価値判断に関するアプローチについて

学習指導要領解説に「音楽は一人一人の思いや感情などを表現したものであると同時に、その表現は社会や文化の有り様と密接にかかわっている」とあるとおり、作曲者の生きた時代や地域、人間像や芸術家像、作曲者の諸作品とそこにおけるその楽曲の位置、作曲者固有の音楽の様式などと、音楽そのものとの関連付けて考えることは非常に重要な学習であり、高等学校の鑑賞における特色であると考えられる。そして、このような学習から音楽文化についての理解を深めることにつながると考える。

授業実践の終末に、価値判断を交流しながら『京鹿子娘道成寺』を鑑賞した際、全ての生徒が非常に高い関心を持って鑑賞している姿は、まさに我が国の伝統的な音楽文化に触れるとともに、『京鹿子娘道成寺』の作者やそれを楽しんだ江戸の町民の生活に思いを馳せる姿であったと考える。

このように、価値判断に関するアプローチを通じて、音楽を形づくっている要素の知覚・感受を基に、楽曲の背景と関わらせながら音楽のよさや美しさを価値判断することは、客観的な事実を根拠に、自らの思いや考えを伝える学習であるだけでなく、時間や空間を超えて楽曲の作曲者や背景となる人々の生活などにつながる学習であり、音楽文化の継承と創造的発展につながると考える。

3 おわりに

人間が社会の成員として、音を媒体としたコミュニケーションを通して作り上げてきた方法や所産の体系と言える音楽文化を伝え、つなげていくことは、次代を担う人材を育てる我々教員の務めである。本研究のような音楽鑑賞の学習と、表現領域の学習との相互の視点から、我が国や郷土の伝統音楽について学習していくことが、我が国の音楽文化の継承と創造的発展、世界の多様な音楽を尊重できる態度の形成へとつなげていきたい。

<引用文献>

- ・宮下 俊也 大熊 信彦 『音楽鑑賞教育における批評能力育成プログラムの開発』 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C) (2013)
- ・西園 芳信 著 『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究－「芸術の知」の能力の育成を目的として』 風間書房 (2005)
- ・国立教育政策研究所 『教育課程の編成に関する基礎的研究 7』 国立教育政策研究所 (2014)

<参考文献>

- ・稲垣 忠 鈴木 克明 共著 『授業設計マニュアルー教師のためのインストラクショナルデザイン』 北大路書房 (2011)
- ・公益財団法人 音楽鑑賞振興財団 編 『これからの鑑賞の授業』 公益財団法人 音楽鑑賞振興財団 (2011)
- ・公益財団法人 音楽鑑賞振興財団 編 『これからの鑑賞の授業 2』 公益財団法人 音楽鑑賞振興財団 (2014)
- ・小林 保治 編 『能楽ハンドブック』 三省堂 (2008)
- ・田中 健次 著 『図解日本音楽史』 東京堂出版 (2008)
- ・藤田 洋 編 『歌舞伎ハンドブック』 三省堂 (2006)
- ・藤田 洋 編 『文楽ハンドブック』 三省堂 (2011)
- ・宮下 俊也 大熊信彦 「ESD (持続発展教育) としての音楽科教育－中学校鑑賞領域の場合－」 『奈良教育大学紀要第62巻第1号』 (2013)

<担当指導主事>

福島 桂 大野 慎一郎